



微熱

赤川次郎

びねつ
微熱

あかがわ じろう
赤川次郎

© Jiro Akagawa 1993



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1993年1月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185307-4

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

微熱

赤川次郎

講談社

目次

1	峡谷	9
2	ハンガー	20
3	夜	33
4	鏡の像	44
5	救急車	57
6	葬儀の後	68
7	一日の違い	81
8	身近なもの	91
9	死が呼ぶ声	101
10	影の指先	113

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
写真	入院	脅迫	病の床	受難	犠牲	白昼の闇	濡れた膝	クリスマス	誘い
230	218	207	195	184	172	160	150	136	126

21	迫る死	242
22	吐血	253
23	隅の闇	265
24	闇から来た者	276
25	憎悪の闇	286
26	伝言	299
	エピローグ	311
	解説	320
	郷原 宏	

微熱

1 峡谷

「失礼ですが——」

声をかけられた時、田川^{たがわ}はすぐには返事をしなかった。

できなかった、と言った方が正確かもしれない。周りに誰がいようと、ハネムーンの間中には自分たち二人しかいないと思ひ込んでゐるものである。

「申し訳ありませんがね」

と、その老人はもう一度言った。

田川啓一^{けいち}が振り返ったのは、妻の布江^{きぬえ}がちょっと腕をつついたからだった。

「何か？」

「いや、お二人でいらっしゃるところをお邪魔して、誠に申し訳ないが、ちょっとシャッターを切っていただけないかと思ひましてね」

「ああ、もちろん。いいですよ。——つい、景色に見とれて」

頼まれたのが簡単なことだったので、ホッとした田川は、そんな言いわけまでしていた。

「このカメラです。——自動のはずですから、このシャッターを押していただければ……」

「分ります。僕も前にこれを使ってみましたからね」

「じゃ、お願いします。——ええと、あそこの崖がけの所で」

「はいはい」

かなり古い、時代もののカメラである。今どき、これを使っている人間は多くあるまい。しかし、それでも、持主に比べれば、ずいぶん新しく見える——と言ったら、皮肉になるだろうか。

「あの人たちね」

と、布江が笑顔で言ったのは、ゆうべの食事の時、そのグループがたまたますぐ近くのテーブルにいて、田川と布江は、

「どういうグループかな」

と、話し合っていたからだった。

老人たちばかり七人のグループで、誰が誰より年上なのやら、とても見分けがつかなかった。男ばかりで、顔立ちなどから見て、兄弟とか家族でないことは確かだったが……。

身なりや持物から考えて、あまり暮しぶりに余裕のある人たちとは見えなかった。しかし、見るからに穏おだやかで、感じのいい一行であることは、布江も田川も同感だったのである。

ただ——なぜ、彼らがこんなオーストラリアまでやって来たのか、ちよつと首をかしげさせられたのも事実だ。

「——どうも、面倒なことをお願いして」

と、田川がカメラを手に、老人たちの方へ歩いて行くと、その中の別の一人が、そう言って寄

って来た。

「いえ、構いませんよ、一向に」

と、田川は微笑^{ほほえ}んで言った。「みなさん、ご一緒で？」

「ええ。あの岩がバックに入りますか？」

「入るでしょう。——じゃ、その手すりに沿って、並んで下さい」

と、田川は言った。

「新婚旅行ですか？」

と、七人の中でも、みごとな白髪で目立つ老人が、訊^きいた。

「ええ」

「可愛い奥さんですな。いや、羨^{うらや}ましい」

「恐れ入ります」

と、田川は笑った。

「うちの婆^{ばあ}さんも、五十年前にや可愛かったもんですよ」

と、その老人は、少し大げさにため息をついた。

それから、あれこれおしゃべりに夢中になっている仲間の老人たちに、

「おい、早く並べよ。頼んでいてお待たせしちゃ、失礼じゃないか」

と、声をかけた。

「星野^{ほしの}さんがいないよ」

と、一人が言った。

「一、二、三……。本当だ。どこへ行ったんだ？」

「手洗いだろう。あの人はやたら近いんだ」

「しょうがないな」

と、顔をしかめて、「すみませんね」

「いや、いいですよ。どうせ同じバスじゃありませんか」

と、田川は言った。「皆さん、お友だちで？」

「ええ。ま、同志というか、同朋というか……」

と、その白髪の老人は肯いた。^{うなず}「交互にシャッターを切ってもいいんですが、やはり七人全員の写真も残したいし、それに、三脚を持って来るのを忘れましてね」

「いや、シャッターを押すぐらい、お安いご用ですよ」

と、田川は言つて、「ここへ来たのは——」

「やあ、やっと戻つて来た。——早く早く！」

少し足許の覚束^{おぼつか}なくなった老人が、それでも精一杯駆けて来る。

「や、すみません。次に停る所まで、大分あるってことだったんでね」と、息を切らしている。

「さ、ここへ入って。——みんなもう少し寄つた方がいい」

白髪の老人が、他の六人を一応手すりに沿つて並べると、田川の方を振り向いて、「どうです

か？」

と、訊いた。

田川はカメラのファインダーを覗いてみた。

——誰もが、七十代には達しているに違いない、七人の男たち。その背景は、少し霧にかすんだ峡谷である。

遠くに望む三つの奇岩が、「三人姉妹の岩」と呼ばれているらしい。田川だって、ハネムーンのための下調べをする暇はほとんどなかったので、このツアーに付いている日本人ガイドの話しか知らないのである。

「あんまり手すりによりかからないで」

と、白髪の老人が注意した。「落っこちるよ」

冗談ではなく、手すりの向うは、鋭く切り立った、百メートルもの断崖である。もちろん、手すりが壊れるなどというわけはないが……。

「OKです。どうぞ入って下さい」

と、田川は言った。

「じゃ、お願いします。二枚、撮って下さい！」

「分りました」

白髪の老人が一番端に加わる。

田川は、背景の岩がフレームに入るように少し退がった。

「——一番右の方、顔がかげになってます。右へ向けて下さい。——そう、そうです」

田川は右手を振って見せた。「撮りますよ！」

シャッターは軽快な音をたてて、落ちた。

「目をつぶっちゃったよ……」

と、一人が言っている。

「もう一枚撮ります」

と、田川は大きな声で言った。

大声を出さないと聞こえないかもしれない、と思ったのである。

しっかりとカメラを持って、シャッターを切る。——OK。

「はい、結構です」

田川は、何だかレントゲン技師にでもなった気分だった。

「——どうも」

と、白髪の老人がやって来た。「お手間を取らせて」

「いいえ、じゃ、カメラを」

と、田川はカメラを差し出したが、白髪の老人は、ちょっとした間、不思議な目で田川を見つめて、

「そのカメラ、すみませんが、持っていていただけますか」
と、言った。

「え？」

田川はちょっと戸惑って、「これを？　じゃ……バスの中へ置いときましようか」

「お願いします」

白髪の老人は、いやに丁寧^{ていねい}に、頭を下げると、「奥さんにも、よろしくお伝え下さい」と、言った……。

「——すんだの？」

と、布江は言った。「あら、カメラを持って来ちゃ仕方ないじゃないの」

「いや……。何だか、持ってくれと言うんだ」

「へえ。変ってるわね」

「うん……。さ、君の写真も撮ろう」

「自分のカメラでね」

と、布江は、手に持っていた田川のカメラを渡した。

——布江を三カットほど撮ると、もうバスへの集合時間になった。

ひどく度の強いメガネをかけて、いつもくたびれているようなガイドが、バスの前で待っていた。

「——ええと、これで十八、十九……。あと七人だな」と、呟^{つぶや}いている。

七人？　——田川は、バスに乗ろうとして、